

総 説 (平成20年度横浜市立大学医学研究奨励賞受賞研究)

大腸発癌における生活習慣因子の相関 および化学発癌予防への臨床応用

高 橋 宏 和

横浜市立大学附属病院 消化器内科

要 旨: 大腸癌の早期発見を目指し臨床の場において便潜血反応, 注腸造影検査, 大腸内視鏡検査などが積極的に行われている一方, 大腸癌のハイリスクグループに対する chemoprevention (化学発癌予防) の研究が注目されている。近年の本邦における大腸癌の増加の原因の一つに生活習慣の欧米化が挙げられるが, そのメカニズムとして糖尿病による高インスリン血症やインスリン抵抗性の他, 内臓脂肪型肥満やそれより分泌されるアディポサイトカインの異常が考えられている。食物繊維・カルシウム製剤・葉酸・ビタミン C, E・PPAR γ リガンドなどが臨床応用されつつある。我が国では内視鏡診断や治療技術は世界で最も高い水準にあるが, chemoprevention の臨床研究は他の先進国に比べて非常に遅れている。インスリン抵抗性改善薬である PPAR γ リガンドなどは臨床応用される可能性があり, 今後更なる臨床的なデータの蓄積が望まれる。